

●2022年（令和4年）はどういう年？

毎年、この時期になりますと皆様から、本年はどう云う年になりますかと聞かれ、ご披露を始めてから、十二支で例えますと、いつの間にかふた周り目を過ぎてしまいました。

と云う、次第でございまして、本年を占ってみましたので、少しご披露させて頂き度いと存じます。

まず、占いは、そもそも遠い昔、殷の時代に、其の源流を持っています。この時代あたりから人々は長い時間をかけて森羅万象、世の全てを注意深く観察することで、物事にはことごとく一定の巡り合わせや、変えようの無い流れが、あるのではないかと云うことに気が付き始めたのです。

しかし、この殷と云う国は、基本的には狩猟民族国家でしたので、あちこちと転々して、いかんせん腰がなかなか据わらなかった。観察はじっくりと行うものですからね。

時代変わって軍師太公望率いる周が殷を滅ぼします。ご存じのように太公望は占いに大変通じておられた、易の大家でもあったのですが、更に漢の時代に入ってから、術としての占いは飛躍的に発展して行きます。漢は農耕民族らしく、落ち着いて物事を計画的に考え、行動しました。まさに単なる占いから暦学に進化発展を遂げることとなります。

易の歴史は古くは、伏羲（ふっき）が作りました先天八卦から始まり、後に文王が後天八卦応を完成させます、そして現代の白陽八卦に至っているわけです。

その意味から申し上げるなら、本日私が皆さんにお話する占いは、この暦学のレベルに達した厚みのある占いとでも解釈頂ければと存じます。従い、ちょっと其の手法につき能書を垂れることをお許し頂きたいと思います。

占いの基本は干支（えと）です。干支は十干（じっかん）と十二支から成り立っています。巷間よく、あの人は猪年生ま

れだから猪突猛進タイプで闇雲に突っ走るので要注意です、と云った類の話を小耳に挟むことがあります。このような例えは、必ずしも当たっていません。十二支は、子（ね）から始まり亥（い）で終わる 12 年間周期の流れですが、ねずみや牛などのエトは、後代の人が勝手に当てはめたものに過ぎず、各動物の性格やイメージなどから、部分的に当たっていると思われるかも知れませんが、実はエトと、其の年の傾向や人の性格の間には、さほどの相関関係はないのです。だいいち、お前さんはトリ年生まれなんだから落ち着きがないんだよね、などどこじつけられたら、気の毒ではありませんか、

一方、十干（じっかん）の方は大切です。十干は、数を数える時の単位で、大げさに云えば数の原理乃至は数理と云えます。もとを正せば人間の指が両手合わせ 10 本あり、勘定をする時に、「物」と「数」とを対応させながら数えると云う基本動作から来ているんです。

つまり、数を数える時のもっとも身近な計算器だったわけです。右手の親指は甲、人差し指は乙と云うように、順番に

小指の戊（ボ）まで行きますと、今度は左手親指の己（キ）に移り小指の癸（キ）までたどり着きます。中国ではこの両手の指は「浣（かん）」あるいは「澣（かん）」と表記されていたのですが、いつしか「干（かん）」と称されるようになったのです。指 10 本の「十」と両手の指を意味する「干」を合わせた造語が、「十干」と云う訳であります。

よく「きのえ」とか「きのと」とはどう意味ですか、と云うご質問を頂きますので、一寸お時間を頂き、折角ですから種明かしをさせて頂きたいと思えます。

易学の基本は「陰陽五行」です。1/3/5/7/9 は奇数ですが、易では奇数と呼ぶ代わりに「陽」といいます。一方 2/4/6/8/10 は偶数とは云わずに「陰」と呼びます。しかし、この陰陽の意味は単なる数の性質を表すだけに止まりません。「陽」は剛、男、父、兄、天、能動的、春夏とすれば、「陰」はこれらに対応し柔、女、母、弟、地、受動的、秋冬となります。世界を二元論で捉えているわけですが、実は易の思想はもっと深いのです。例えば絶えず変化しながら季節は循環して行きます。春には夏が息づき、夏には秋が準備

されているわけです、陰には陽が息づき、陽のなかには陰が既に出番を待ち構えているのです。変化のなかに存在する不変の法則、ちょっと大袈裟な言い方ですが、宇宙の秩序や法則と云った極めて論理的なものなのです。

さて話しを本論に戻しましょう。広辞苑で「干支」をひいてみますと、そこには（「兄（え）弟（と）の意」）と出ています。そうです、「兄弟」の正しい読み方は「エト」なのです。これを十干に当てはめます。まず、最初の甲は「一」番目ですから奇数の「陽」即ち「兄（え）」が振り当てられます、次の乙は「二」番目ですから偶数の「陰」が振り当てられますので、「弟（と）」となります。この法則に基づいて最後まで続けると、三（奇数）番目の丙は「兄（え）」、四（偶数）番目の丁は「弟（と）」、更に戊（ボ）＝兄（え）、己（キ）＝弟（と）、庚（コウ）＝兄（え）、辛（シン）＝弟（と）、壬（ジン）＝兄（え）、癸（キ）＝弟（と）となります。

陰陽に続き重要な要素に五行という考え方があります。起原は中国固有のものではなく、遠くバビロニアにあるとの

説もありますが、この「五」は「五つの材料」で人間が生きて行くうえで欠かすことが出来ない材料や道具を、木・火・土・金・水としてシンボライズしたものです。我々は「流行」に取り残されないように'などと、日常的に言いますが、この場合の「行」は、「めぐる」「めぐりめぐって変化する」という意味です。また「行用」の「行」には「行う」「利用する」「使う」の意があります。総じて「行」とは天をめぐり、人間が利用することを意味しているのです。易学では、五行即ち木火土金水が、天の監視のもと、天上を絶えることなく駆け巡り、其の五気を天が人々に与えることで、人間は生命を保ち、更にはこれらを材料や道具として日々の生活に役立てることができると考えるのです。「五」を単位とした様々な組み合わせによって物事が成り立つと云う発想は、古代からあったようです。

さてそろそろ、この話しの纏めにかかりましょう。この五行を陰陽（えと）と組み合わせて配分すると、答えが出ます。

●木→甲乙

甲は「（木）きの（兄）え

乙は「(木) きの (弟) と

●火→丙丁

丙は「(火) ひ の (兄) え

丁は「(火) ひ の (弟) と

●土→戊己

戊は「(土) つち の (兄) え

己は「(土) つち の (弟) と

●金→庚辛

庚は「(金) か の (兄) え

辛は「(金) か の (弟) と

●水→壬癸

壬は「(水) みず の (兄) え

癸は 「(水) みず の (弟) と

さて、お待たせしました。それでは早速、西暦 2022 年度の世を、占ってみましょう。

2022 年の干支は、十干が壬(訓読みで「みずのえ」)にあたる年回りとなっています。この十干は読んで字のごとく、全部で 10 段階あり、甲から始まって癸まで行きますと、また再び最初の甲に戻ります。これを 10 年周期で永遠に繰り返します。この 10 の段階をそれぞれ、甲・乙・丙・丁・戊(ボ)・己(キ)・庚(コウ)・辛(シン)・壬(ジン)・癸(キ)と呼びます。

2022 年度の十干である壬(音読みで「ジン」)は、甲(コウ)から始まり癸(キ)で完了する流れの中の 9 番目に当たり、日本では昔から、「みずのえ」と読んで居ます。

一方、十二支は五黄虎(ごおうのとら)年ですので、十干(じっかん)と十二支を合わせて、今年「壬五黄虎」(みずのえ・ごおうのとら)の年回りとなります。余談になりますが、この十干と十二支の組み合わせは全部で

60 通りしかありませんで、よく還暦のお祝いなどと云いますが、これはめでたく一巡しましたね、ということです。赤い「ちゃんちゃんこ」を着てゴルフをする、などと洒落たことを言いますが、これは今でも中国では赤ん坊が生まれまると赤い布で包(くる)む習慣から来ているんですね。

「壬」(みずのえ)は、先程、お話させて頂きましたが、甲に続く十干の9番目に位置しています。甲から始まり、癸(キ)で終わる十段階は、一本の草木に例えられた、生命体の一生を表しています。甲は甲冑と云う言葉がありますように、未だ殻に閉じ込められています。草木の芽としてやがては殻を破って顔を出す一歩手前の状態を意味する象形文字なのです。乙は芽は出たのですが、外の空気が冷たく、風にも煽られ、未だひ弱な状態です。「乙」の字がくねっているのは、其の様子を表現したものです。「丙」の字の上の一は陽気を表し、生命・エネルギーが盛んになり、たかまることを意味しますが、冂は困いを表し、それ

に入と云う字が書いてあります。つまり、陽気が圀いの中に入り、やがて陰気が生ずる気配が感じられるのです。「丁」は其の前の年の丙(ひのえ)の上の一を承けて、更に陽気が進んだ段階を示し、春から延びて来た陽気の最終的な段階に入って来ます、季節で云いますと、四月、五月に当たります。「戊(ボ)」は、草木が繁茂して旺盛な様子です。「己」は長い糸の先が曲がっているのですが、起の原字で、草木が伸びて行く様子を表現しています。「庚」は「継続」を意味し、「辛」まで行きますと、これは針など尖った物で刺激するところから草木が枯れ始める状態を表しています。「壬」は女性が妊娠した形を表しており、内部に新しい生命(種子)を妊らんだ状態で、これが「癸」まで行き着きますと、種子の内部が成熟した状態となります。このように十干とは、草木が硬い殻を破って芽を出し、やがて成長して、葉が繁り次の世代へ種子を残し枯れ果てて行くと云う一連の営みを10の段階に

分けて表しているわけです。凄い観察力と洞察力ですね。

実は 2014 年は甲から始まる、向こう 10 年間のトップバッターだったのです。2015 年度は乙で、2016 年度は丙です。昨年 2021 年度は 10 年 one cycle の八段階」目ですので、これは事が成就するには、2020 年と同様に、更なる我慢と努力で試練に堪える必要があったと云うことになります。

ここで、話しをもう一度整理してみましよう。2015 年の「乙」と云う字は前年の「甲」で硬い殻を破り出て来た若い芽が、外の寒気が未だ強く、真っ直ぐに伸びかねて曲がりくねっている象形文字で、紆余曲折の状況を表しています。2016 年の年周りである「丙」には炳(あきらか)とか、柄(え)と云う字のように、四方に延びる権力の意があります。昨年 2017 年の「丁」は、植物の芽が伸びようとして地表にあたり、なお表面に出きれない時期と云えます。つまり「丁」と云う字は、新旧両

勢力の衝突を意味していました。「丁」が在来の勢力を意味する時は、「さかん」と読みます。小池さんは都知事選で圧勝しましたが、国政選挙に踏み込んでしまったのは残念ながら「丁」の時勢に逆らうものだったのです。余勢を駆(か)る時期ではなかったのです。2018年の「戊」は、「茂る、繁茂する」に意味になります。つまり万物が茂り繁茂する」ので、剪定が必要でした。2019年(平成31年)の「己」の三本の横線は糸を、二本の縦線は糸を分かつ形を表しています。糸筋を分けることから乱れを正して治める意を表しており「紀」の原字となりました。為政者はこの素乱した糸の端緒を引き出し、糸のもつれを伸ばし、規律を正して明確にし、規律を正して明確にし、己を正すことが大切であることを暗示していました。

一昨年度2020年の「庚」の象形文字はで、字の真ん中は杵(きね)の形、下の左右は両手の形を表し、字全体では杵を手で取る形となります。杵で臼(うす)の中の穀物を搗(つ)くと糠(ぬか)が出来ます。糠は「米」と「庚」の合字です。この動作は搗き続けなければならないので「継続」の意味を

表します。前年に続き試練の年周りを暗示していたのです。そして去年 2021 年度は「辛」でコロナウイルスの蔓延など読んで字のごとく誠に辛い一年でした。本年の十干ですが、甲・乙・丙・丁・戊(ボ)・己(キ)・庚(コウ)・辛(シン)・壬(ジン)・癸(キ)の流れのなかで、大きなエネルギーを妊(壬)む巡り合わせの年周りになります。

● 「壬」(みずのえ)の一字は、左側の象形文字から右側に転化したものです。



「はた糸(織物を織る時の糸)を巻きつけた」玉の部分が壬の中の一が長くなりました。

転じて内在する核が増大する意となりました。胎児ならば大きくなってお腹が膨らんでいる姿を表わし、妊娠の妊です。

●「寅」の象形文字 →



は建物・組織・存在を表わし、真ん中は人が差し向かいになっている形で、手を合わせる・約束する・協力する意味を表わしています。寅に彡(さんずい)扁を付けると演(のばす・のべる)で、演説・演奏・演技など、進展を意味します。

今年の五黄の寅は凄いエネルギーを内蔵している年です。36年に一度現れます。

五黄の「黄」は太陽光線(赤・橙・黄・緑・青・藍・紫)の7色の中心の色で、科学的にも黄色光は物を育てる力が最も強く、植物に照射すると発芽を促進し生長を増大させます。それ故、昔から黄色は王者の色として、皇帝は黄色の衣を着て、黄色に壁を塗り、黄色の瓦を用います。このように強い生命力を持った黄色に、更に百獣の王成(寅)が加わるのですから鬼に金棒です。

易経に「大人虎変」「君子豹変」と云う言葉があります。「成変」の意味について学者の説では、虎は夏から冬にかけて毛が生え変わります。その生え変わった時の虎の毛は実に鮮明で思わず目を見張る様であると云われます。つまり「廃変」と云うことは悪い意味の変化ではありません。例えば宰相であれば、今まではっきりしてこなかった事案を、虎の毛が生え変わって光彩を放つごとくはっきりさせ、国民が目を見張るくらいに自分の思想・信念・行動を明確にすると云うことです。そうすれば、それに応じて開僚・官僚が動き、君子豹変するという訳です。

いずれにしても悪い意味に変化するのとは全く意味が違うのです。

「国民よしっかりせよ」ではなく、大切なことは、言うよりも先ず上に立つ者が形で見せ「虎変」しなければなりません。それにはやはり、虎のように威厳があって力強く、時には少し凄みがあるようでなけ

ればなりません。

覇権国家が「白」から「黄」に、つまり米国から中国変る兆候が顕著に現れる年周りとなるでしょう。

また五黄の寅年は大きな自然災害に見舞われています。

・ 1914 年（大 3 五黄寅）1 月 7 日桜島が大爆発を起こし、30 億トンの溶岩を噴出して、9 千数百人に上る死者を出しています。桜島と大隅半島がくっ付いたのもこの時です。

富士山が大鳴動し、秋田でも大地震が発生しました。

・ 1962 年（昭 3 7 壬寅）8 月 2 4 日三宅島大噴火、島民 1800 人余が千葉県館山に避難。

・ 1986 年（昭 6 1 丙寅）1 1 月 1 5 日伊豆大島三原山噴火、溶岩が内輪山を越え外輪山との間のカルデラ内流出、全島民約 1 万 300 人が島外に避難しました。

「時期は特定できないが富士山 100%噴火する」と公言している地震学者がいます。

その人は 1955 年（昭 30）生まれ、東京大学卒・地

球科学者・京都大学名誉教授。専門は火山学・地球変動学の鎌田浩毅博士です。

富士山は日本を代表する活火山で、直近の噴火は江戸時代の1707年（宝永4）で、南東斜面にある宝永火口から大爆発しました。その後約300年の間、噴火していませんが、鎌田博士の予想では、東日本大震災とは桁違いの規模で、南海トラフ巨大地震は2035年±5年に襲ってくると予想しています。

以上、時勢の知らしめるところを易の視点から披露させていただきました。

2022年1月20日記

内藤 彰信

易學総合學術院總裁(本部 台北市)、丸全昭和運輸(株)取締役、学校法人実践学園理事長

追記

以上の占いは旧暦に基づいておりますので、少なくとも本年1月末頃までは、旧年度(2021年度)の靈氣が漂っております